

高瀬舟／その他（森鷗外） 其の二

「カズイスチカ」の花房醫學士は大學で醫學を學び、病院に勤めて教師になつた位だから、醫學について「大分窟だけは覺え」てゐた。一方、顎鬚の長い彼の父の花房の翁は、一介の町醫者たる事に安んじて、盆栽や煎茶を好み、洋書を讀むのを面倒がつて、「新しい醫學の上の知識には頗る不十分な處」があつた。然るに、自分には父に「及ぶべからざる處」があると、花房は自ら認めざるを得ない。鷗外は書いてゐる。

翁は病人を見てゐる間は、全幅の精神を以て病人を見てゐる。そしてその病人が輕からうが重からうが、鼻風だらうが必死の病だらうが、同じ態度でこれに對してゐる。盆栽を翫もてあそんでゐる時もその通りである。茶を啜すすつてゐる時もその通りである。

花房はさういふ父の平生へいぜいを考へて見ると、「自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に濟ませて行くのに反して、父はつまらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐる」事に氣付き、父の態度が「有道者の面目に近い」と思はれて、俄にはかに「父を尊敬する念を生じた」のであつた。

「妄想」の主人公も花房と同じく、「遠い向うに或物を望んで」ゐる己れを甚あきただ憚あきたらなく思つてゐる。彼は云ふ。

日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事實を蔑ないがしろにする反對である。自分はどうしてさういふ境地に身を置くことが出来ないだらう。／＼日の要求に應じて能事をほ畢をほるとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出來ない。自分は永遠なる不平家である。

鷗外は「寒山拾得」に於て、世の中には道とか宗教とかに全く無頓著な人と、「專念に道を求める人」と、その中間に存在する「中間人物」とがあると書いてゐる。花房の翁は自づから

にして「道を求める人」であり、「高瀬舟」の喜助はその「更に純粹なもの」である。そして彼等に「尊敬する念」を抱く花房も同心の庄兵衛も「中間人物」といふ事になる譯だが、鷗外自身は「中間人物」の自覺と、「専念に道を求める人」を「尊敬する念」の眞摯とを生涯持ち續けた古き日本人であつた。

「高瀬舟」に描かれてゐるのは「古き封建の世の約束の世界のかけに靜かに咲く人間本然の直情」だと、日夏耿之介は「鷗外文學」に書いたが、「古き封建の世の約束」に縛られた社會に於て、「人間本然の直情」が美しく咲いた過去は、確かに現實に存在した。江戸中期の日本人を活寫した伴嵩蹊ばんかうけいの名著「近世畸人傳きじん」を繙ひもといてみるがよい。身分や貧富や男女の別なく、「専念に道を求め」て生き死にする逝きし世の日本人のひたむきな姿に瞠目だうもくせざるを得ないであらう。さういふ「畸人」達への哀惜の念が、鷗外をして「高瀬舟物」を書かした所以でもあるが、彼はただ哀惜の念に浸つてゐただけではなかつた。「自分は永遠なる不平家である」と「妄想」の主人公は自嘲して云ふが、晩年の鷗外の姿は、娘の小堀杏奴の目には次のやうに映つてゐたのである。

父はまた落著いて物を片付ける事が好きだった。埃が積つた本を引出して、羽みたいなもので丹念に拂つてゐる時など、如何にも楽しさうにしてゐた。／「なんでもない事が楽しいやうでなくてはいけない」といふのが父の氣持だった。（「晩年の父」）

（「山椒大夫・高瀬舟」、阿部一族・舞姫」、新潮文庫）